

戦合増三



愛川町教育委員会

はじめに

えいろく
永禄12(1569)年、世は戦国時代でした。
当時の代表的な戦国大名、さがみのくにほうじょう相模国北条氏と甲か
いのくにたけだ斐国武田氏の軍勢が、この地で戦いました。
一般に「みませかつせん三増合戦」といわれる戦いです。わ
が国の歴史上に、愛川町の地名が、大々的に
登場した一大事件だったといえるでしょう。

激しい戦いを物語るかのように、この一帯
からは、刀や槍、鉄砲の弾等が出土していま
す。また、「くびづか首塚」、「どうづか胴塚」、「たけだしんげんはたたてまつ武田信玄旗立松」、
「あさりみょうじん浅利明神」等の史跡が残っています。

現在、愛川中学校となっている「たしろ田代城」
も、戦いに巻き込まれ、落城したと伝わって
います。

昭和44年、合戦の日から四百年を経て、激
戦の地に記念碑を立て、この冊子の初版が編
まれました。以後、刷を重ねてきましたが、
時代が変化する中、内容を再検討し、改訂版
を発行いたしました。

編集に際しては、愛川町文化財保護委員を
はじめとする関係者一同のお力添えを賜りま
した。厚く御礼申し上げます。

この冊子が、今後とも、三増合戦の史跡探
訪のよき道標となることを願っております。

平成28年3月

愛川町教育委員会



三増合戦場跡遠望（経ヶ岳中腹の林道より撮影。手前は田代地区の住宅街）

• 表紙の文は武田信玄旗立松蹟址碑の碑文の一部です。

●三増合戦とそのあとさき

信玄の駿河攻め

甲斐(山梨県)の武田信玄が永禄11(1568)年に駿河(静岡県東部)攻めをはじめた。その前の年、同盟関係にあった駿河の今川氏真が離反し、塩や魚の移出を停めてしまったことに対する報復と解決手段であったと思われる。

信玄は、永禄11年12月、東海道すじの由比に進み薩埵峠を攻め、今川氏真を駿府(静岡市)の城から掛川の方へ追い落とした。

これに対して小田原の北条氏康は、娘婿の氏真助勢のため、4万の大軍をもって、翌永禄12年1月、薩埵峠に出陣した。長いにらみあいとなったが信玄は遠州(静岡県西部)の徳川家康や越後(新潟県)の上杉謙信の動きも気になって、その年の4月末甲府へ引きあげた。

小田原攻め前しょう戦

信玄は、永禄12年6月、1万8千の兵をひきいて伊豆の三島や韮山などに攻めこんだ。村々を焼き、うちこわし、さんざん暴れまわり、川成島に陣を取ったが、洪水のため引き返した。

これに対して北条氏は、評定を行い、3万の大軍を伊豆から駿東へかけて分駐させ守りを固めた。

小田原攻め

この北条方の配置を知った信玄は、好機到来として、関東侵略小田原攻めの作戦を計画した。

武田方の主力2万は、永禄12年8月下旬に甲府を出発。道を北にとって信州(長野県)佐久に出て、碓氷峠を越え、群馬西部から埼玉へと南下。寄居町の鉢形城、吉見町の松山城を攻めた。また、分かれた一隊は、江戸のまわり、稲毛(川崎)、帷子(保土ヶ谷)などの諸所を攻め、各地を放火して歩いた。北条方の兵力はこれらの方面からも集められて伊豆や駿河の防備に行っていたため、武田方は大きな抵抗にあわずに進み、9月末頃諸隊は集結して拝島に本営をおいた。

一方郡内から八王子へ進出した武田勢は、高尾に近い十里山で北条勢を破り同じ日に拝島に着いた。

合流した武田方は、氏康の子北条氏照が守る八王子の滝山城を攻めたが、守りが固く、とても落ちそうにない。長びけば小田原攻めにさしつかえるので、信玄は2日間で囲みをと き小田原へと向った。相原、橋本、上溝を通り勝坂に出て、相模川を渡ってその夜は厚木付近に夜営、9月28日には増水中の酒匂川まで進んだ。

10月1日に小田原に突入した武田方は、池門あたりまで攻め込み、町々を焼き払った後、風祭に本陣を置いた。

一方北条方は駿豆方面に兵力を送っているため、城中には兵が少なく、十分な応戦は不可能であった。評定を行い、上杉謙信が攻めてきた時のように、ろう城作戦を取ることを決め、近辺に出ている兵をことごとく城中に入れ、防備に当たった。

武田方は城兵が出てこないのので戦いにならず、民家や社寺までも焼きはらい、乱暴をくり返した。



早雲寺蔵 北条氏康像



高野山持明院蔵
武田(晴信)信玄像

撤兵と北条方の追撃

信玄は永禄12年10月4日の朝“鎌倉鶴岡八幡へ参詣”と偽りの報を流しながら小田原を発った。しかし、平塚まで来た武田方は進路を北に変え、甲州への道を取り、その夜は田村、大神のあたりに宿営した。

この情報を得た北条氏康は、敵は必ず三増峠を越えるものと判断、子の氏照・氏邦、女婿綱成ほか関東各地の将兵らおよそ2万を三増へと向寄せた。

舞台は三増峠へ

明けて10月5日、武田方は田村、大神のあたりを出発。北条勢の動向を知った信玄は、

“氏康父子がきてさえ自分には勝てないのに、家中の者どもだけならば自分が勝利する”と確信した。

厚木を過ぎ反田あたりで中津川を渡り金田の牛窪坂を登り依知原へ出た武田方は、道を北西にとり在郷の土豪と小ぜり合いをしながらも三増へと進んだ。

一方氏照ら北条方の軍勢は、武田方より先に着いた三増の地ではあったが、いったん半原台地に退き態勢を整え、その上で武田方と対陣しようとした。

この間に武田方は、三増の高地に陣を敷き、旗を立てた。



合戦の舞台となった三増峠の登り口



木太刀も奉献されている浅利明神



合戦場の一部(現在は茶畑になっている)



浅利明神内にある曾雌知義が建立した浅利信種の墓碑

三増合戦

陣容を整えた北条方は、10月6日の明けがた志田、道城、町屋の原に兵を進め、ここに三増合戦は開始された。

はじめ、武田方の一部が山を登るのを退却と見間違えてしまった北条方は、残らず討ち取れとばかりに攻めた。武田方のしんがりを北条氏邦、綱成らの一団が攻め、激闘は北条方有利のうちに展開。武田方の侍大将浅利信種は、綱成の部下が放った鉄砲で胸を撃たれて戦死した。また志田原に向った氏照らの一隊は四郎勝頼、馬場信房らの陣地を攻撃。北条方は武田方を高地の下まで追いつめていった。

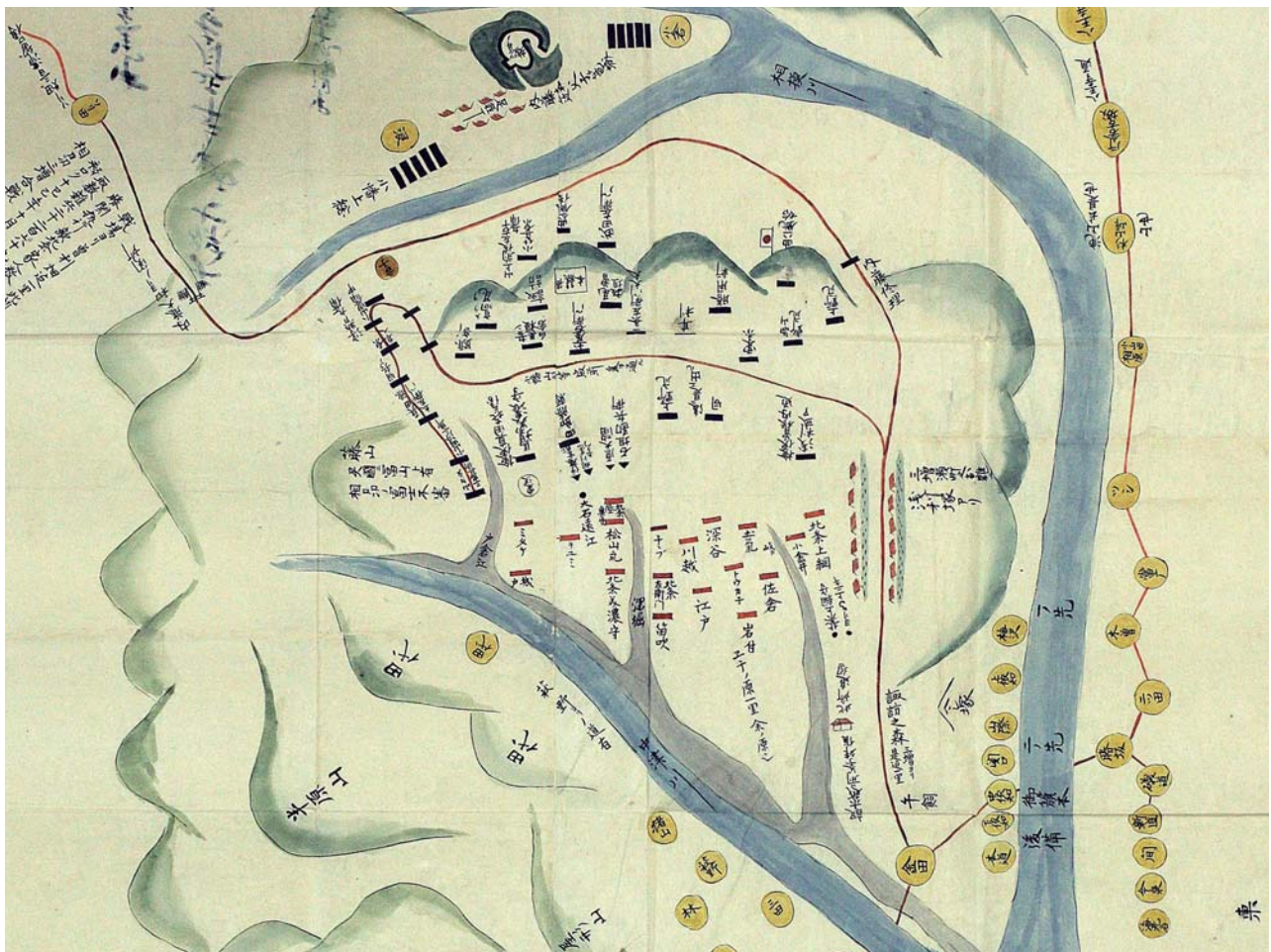
しかし、この時、先に中峠を登っていった山県昌景らの指揮する武田方の5千の精兵が山の向うで折り返し志田沢沿いに下ってきた。

これを機に、信玄の旗本が真正面から攻めかかったことにより、北条方は総崩れとなり、中津川を越え、半原山に逃げた。

北条氏照は味方総敗軍の中に踏み止まって奮戦していたが、馬が倒れ止む無く自刃寸前というところを家臣に助けられ、ようやく半原山へ脱出したという。

氏康の嫡男氏政以下の1万の本隊は荻野新宿まで駆けつけてきたが時すでに遅く、敗軍と聞いて小田原へ引き返した。

信玄は長追いをせず、軍勢をまとめて旧津久井町の串川から旧相模湖町の反畑に出て、ここで戦勝の式を行ない戦死者の供養をした。『甲陽軍鑑』によると戦死者は北条方3,269人、武田方900人とあり、戦いの激しさを示している。信玄は翌日甲府に向けて帰陣した。



三増合戦絵図 ■が武田方、■が北条方の陣立
 ■馬場美濃守→馬場信房 浅利式部→浅利信種 山カク→山県昌景
 ■北条陸奥守→北条氏照 北条上綱→北条綱成

合戦後の両軍

北条方は、焼かれた町や城の復興に力を注ぎ、また信玄の再攻に備えるため、駿豆に配置していた兵力の大部分を小田原に引き上げた。

北条方の状況をみた信玄は、これこそ絶好の機会とばかりに、帰陣後ひと月もたたぬうちに、甲府を出発し、駿河に侵入。御殿場、山北の神繩、小山から三島をうばい、12月6日には蒲原の城を落とすなどして、一旦帰陣。翌永禄13年1月下旬には焼津の城を落とし、

ふじえだ しみず よしわら
藤枝から清水を席卷。4月から5月には吉原、ぬまづ
沼津に転戦。また8月には伊豆韮山を囲むなどの働きを続け、年来の駿河攻略を実現していった。

歴史の表舞台からは少し隠れたような三増合戦ではあったが、その後の駿河における武田、北条両者の動向をみると、なかなか重要な戦いだったことがわかる。

☆以上は、『甲陽軍艦』筆の記録を古文書で補正。

●ゆかりをたずねて

たしろじょうし はちまんしゃ
田代城址と八幡社



田代城は、北条氏の家臣内藤氏の居城で、伝承では三増合戦のとき敵の火矢を受けて焼けおち再建されることはなかったという。しかし、その守護神の八幡社は愛川中学校の裏の丘に、たぶの木に囲まれて昔を今に伝えている。

くびづか どうづか
首塚と胴塚



四千人にも及ぶ両軍の死者をどのように葬ったかは伝わっていない。志田道と町道との分岐点の丘の上を昔から首塚といっているが、こうか
弘化2(1845)年に不動尊が建てられてからは不動堂ともよばれるようになった。ほうえい
宝永3(1706)年9月に建てた傍の碑には、当時この辺に戦死者の幽霊が出没するので念仏供養したと刻んである。なお道を隔てた志田沢沿いに胴塚と呼ぶ塚がある。昭和のはじめ小刀一振が出土した。

あさり ぼしょ あさり みょうじん
浅利墓所と浅利明神



かなやまはら げんろく そしつね
金山原の丘の上にある。元禄13(1700)年3月曾雌常
えもんともよし まきのびぜんのかみ
右衛門知義という人が主人牧野備前守の命によりこの
地を検分した折、自分にゆかりのある浅利信種がここ
で戦死したことを知って「浅利墓所」と刻んだ墓標を
建てた。その後、寛政元(1789)年に村人が墓の側か
ら小さな瓶を見つけ、信種の遺骨だといって丘の下に
埋め、別の碑を建て覆屋を設けた。これを浅利明神と
か浅利さまとか呼び、戦前までは詣る者も多く、立願
成就のときは木の太刀を納める慣わしだった。

たけだ しんげんはたてまつせき しひ
武田信玄旗立松蹟址碑



旗立ての言い伝えのある老松が枯れてしまったこと
を惜んで、高峰村青年団が昭和3年11月に建てた。

撰文は、日本紋章学で名高い宮ヶ瀬出身の沼田頼輔
である。

しだざわ
志田沢

何千人とも知れぬ死傷者の血潮が流れて沢をなした
という伝承から「チダサワ」という別称を残している。

おん がわ
隠川

北条方の武将内藤秀行らが逃げ隠れ、落ち着いたと
伝わるところで、隠家とよばれていたという説もある。
またこの上流、原下の対岸あたりには北条方の敗残兵
たちが逃げ場を失い中津川原に飛び降りたという話が
残っている。

むこうやま
向山の半原神社

半原神社は、むかし向山の小平というところにあっ
た。三増合戦のとき信玄がこの社をみつけ戦勝を祈願
し、帰陣後、信州諏訪神社の分霊を送ってきて祀った
と伝えられている。ちなみに半原神社は諏訪大明神と
呼ばれていた。

信玄道

しもかわいり
厚木市下川入の
ろっほんまつ
六本松あたりから
たかみね
中津、高峰地区を
経て三増峠を越え、
ながたけ
旧津久井町長竹か
ら反畑に出る古道
を信玄道と呼ぶこ
とは、てんぼう
天保期に書
かれた新編相模国
風土記稿にも載っ
ている。曲折が少



なく、いかにも軍勢がおし通ったような感じがある。
所によっては「信玄にげ道」と呼んでいる。

くまさきんべえたいらのむねきよ
熊坂金兵衛平宗清

地域に残る伝説。熊坂金兵衛は三増合戦のころ小田
原領下川入惣代役であったが、北条方から武田方に加
担したという疑いをかけられた。金兵衛は、その疑い
が村の人々にまでかけられることを恐れて自分からそ
の罪に服し、旧津久井町根小屋の明日原で斬罪に処せ
られた。その後、その疑いが晴れ許されたので、遺骸
を当地に引き取って葬り、五輪の塔を建てて墓印とし
た。

村人はこの金兵衛の義侠に感じ慶安2(1649)年正月
神明社を建てて祀った。

中津地区にある龍福寺は、この人の菩提を弔うため
子の宗仲が建てたとの説もある。

ときのかえざか
関の声坂

かにさわ
坂本の蟹沢からバス停坂本入口の間にある坂。合戦
のとき武田軍が「ときのかえ」をあげたというのでこ
この名がついた。「吹き上げ坂」、「おおいしざか
大石坂」、「とうの木坂」とも
いう。

出土品



昭和33年に金山原で発見の槍の穂先と折れた刀

近隣MAP



三増合戦場跡案内図



【三増合戦場跡へのアクセス】 ※三増合戦場碑までの所要時間

- バス
- 厚木バスセンター (本厚木方面) 田代經由半原行「田代板上」下車 徒歩約20分
 - 中荻原經由上三増行「三増」下車 徒歩約15分
 - 淵野辺・相模原・橋本駅 (相模原方面) 田名バスターミナル行「田名バスターミナル」乗り換え 半原行「田代板上」下車 徒歩約20分
- クルマ
- 圏央道相模原愛川IC⇒国道129号線を経て、県道65号(厚木愛川津久井線)(約20分)
 - 圏央道相模原IC⇒津久井広域道路を経て、県道65号(約15分)
 - 東名高速道路厚木IC⇒国道129、412号線を経て、県道54号(相模原愛川線)(約40分)
 - 中央自動車道相模湖IC⇒国道20、412号線を経て、県道54号(約40分)
- ※三増合戦場碑は、「神奈川県愛甲郡愛川町三増1183-3」付近にあります。

愛川町教育委員会

〒243-0392 神奈川県愛甲郡愛川町角田251番地1
TEL 046-285-2111 (代)

愛川町文化財 [検索](#)

愛川町郷土資料館 (県立あいかわ公園内)

〒243-0307 神奈川県愛甲郡愛川町半原5287番地
TEL 046-280-1050

愛川町郷土資料館 [検索](#)